

聖霊降臨後第11主日（特定15） イエス様の外国旅行

先日、私がイスラエルへ5回行った、ということをお話すると、呆れられたりしました。子どもの時には、兼高かおる、という人がパンナムの飛行機で外国に行つての体験をレポートしている番組を見ていましたが、それは特別な人のすることであつて、外国旅行なんか夢のまた夢のように考えていました。ところが現代では私たちは、気楽に飛行機を利用して外国旅行ができるようになりました。

ところで、イエス様は30年余りのこの世での生涯の間、外国旅行をしたことはあつたでしょうか。

今年私たちが読み進めている、マタイによる福音書では、イエス様は生まれたばかりの時、ヘロデ王に殺されないように、エジプトに逃れたことがありました。しかし、これは正しい情報かどうかわかりません。

ルカによる福音書では、生まれて40日目に、ヘロデ王のいるエルサレムにこの聖家族は宮参りに行つた、ということになっています。幼い時にエジプトへ行つた、というのは、旧約聖書の出来事と関連付けたい、マタイによる福音書の著者の創作ではないか、と私は思います。

旧約聖書の最大の英雄モーセは、エジプトで奴隷だつたイスラエル民族を約束の地へ導いた方ですから、その行動に倣つた形をとりたかつたのではないか。モーセが生まれた時、男の子はナイル川へ放り込んで殺さなければならない、というファラオの命令に似せて、ヘロデ王が新しいユダヤ人の王の出現を恐れて、ベツレヘムの2歳以下の男の子を殺したんだ。その出来事を描くことでモーセのような偉大な指導者の生涯を連想させようと、マタイが脚色したのは、と私は思っています。

イエス様の幼子の頃の話は別にして、イエス様が弟子たちを連れて、唯一、イスラエルの国を出られたのは、今日の、カナンの女の信仰の話の時だけです。このカナンの女の人の娘が癒される話が、イエス様の公生涯で唯一の外国旅行です。

同じ出来事を、マルコによる福音書7章では「シリア・フェニキアの女の信仰」という風に地名が変わっていますが、同じ地中海沿岸の北の町ティルス地方の出来事として描いていて、イエス様とその女性との会話も似たようなものです。

それで、今日の福音書の内容に入ろうと思いますが、

今日の福音書の箇所に出てくるイエス様の言動について、私たちは、あまり素直には受け入れられないのではないかと、思います。自分の子どもが病気になるので、必死でイエス様に助けを求めている、このカナンの女の人に対して、イエス様は3回も、拒否するような態度や発言をしておられます。

最初は、この女性の求めに対して、「何も答えない」という態度です。

2番目は、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」という発言。

3番目は、「子供たちのパンを取つて子犬にやつてはいけません。」という発言です。

どうして、イエス様は、このような冷たい態度を取ったのでしょうか。それを今日は考えてみたいと思います。よく言われるのは、この女の人の信仰を試されるためだった、という解釈です。おそらくそうでしょう。

イエス様は、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。」と山上の説教で教えられ、それをティルスとシドンという、イスラエルの外の、外国で、その信仰を持った女性に出会われたのでしょうか。必死なひたむきさを期待された。

しかし、それにしても、気になるのは、2番目に拒否された時の言葉です。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」という発言は、私たちのような、イスラエル人ではない者には、素直に受け取れない言葉のように思われます。

そこで、これを理解するには、もう少し、イエス様の発言の背景を知っておく必要があります。

最初に言いましたが、イエス様は、これらの言葉を、外国で話しておられる、ということです。

しかも、それは、「伝道するため」ではなく、「弟子たちを静かな所で教育するため」だったろうと言われています。イエス様の活動は、その大半が、ガリラヤ湖の周辺地方でした。ところが、大勢の人に食事を与えたり、病気の人を治したりすると、噂が広まって、人びとが押しかけてきます。

そして、そのほかに、イエス様の存在を面白く思わない、ユダヤ教の、律法学者とかファリサイ派がつかまとうので、弟子たちに、落ち着いて教育できないのです。ですから、外国に行こうとされたんです。イスラエルの外に出ると、律法学者やファリサイ派は、そこまではイエス様については来ません。自分たちを、神様から選ばれた民だと信じて、外国人を軽蔑している人びとですから、わざわざ外国人と接触するようなことは避けるからです。

イエス様は、御自分の生涯の活動の場所、特に伝道の対象は、イスラエルという、限られた範囲だけにしようとしておられたのではないかと。少なくとも、赤ちゃんの時、エジプトへ行った以外は、イスラエルを離れたのは、今日の箇所だけです。

そして、イスラエルの国の中だけで活動し、弟子たちの教育に徹しておられたから、救いの業を完成することができたのではないのでしょうか。

そのように徹底した、自己限定と申しましょうか、限られたところで、力を集中したので、そのあとを受け継ぐ弟子たちに、仕事を託すことができたと思われまます。

イエス様は天に昇る前、弟子たちに「あなたがたは行って、すべての民を私の弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」という命令をして、世界中に送り出されたのです。

もし、イエス様が、御自分でローマ帝国に出て行って、救いの業を完成しようとするなら、対象になる地域の広さ、人びとの多さのために、とても3年では活動できなかったことでしょう。

求めに応じて、どこへでも出かけていたなら、弟子たちの教育もできなかったし、それを実現するには、何十年間、いや何百年も活動しなければならなかった、と思うのです。

そのような、イエス様の原則があったから、このような発言になったのではないか、とされています。

そして、もうひとつ、今日の、カナンの女の女の人へのイエス様の言葉ですが、
「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない。」という言葉にしる、
「子供たちのパンを取って子犬にやってはいけない。」という言葉にしる、言葉だけを見たなら、ユダヤ人だけが特別であって、外国人は、子犬に等しい、という差別発言のように見えます。

しかし、イギリスのある聖書学者が書いている言葉ですが、「言葉というのは、言う人の調子や表情で、違った意味をもってくる。」と言うのです。

『ひどい言葉も、微笑があるとその調子がやわらぐ。友人に対して、笑いながら「悪者」とか「いたずら者」といえば、その言葉はとげがなく、愛情すらも感じさせる。この場合、イエスの顔にうかぶ微笑みと目にたたえるいつくしみが、この言葉の中に侮辱と憎しみを感じさせなかったに違いない。』

イエス様が、「私は、いつもイスラエル人を相手にしているんだ。子犬のような外国人は、相手にしないんだよ。」ということを笑いながら言ったので、この女の人も、イエス様の微笑とまなざしに安心して、ちょっと茶目っ気か、ユーモアを含んで、「子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」と、返事をしたと思うのです。

私たちが、このイエス様の発言や行動から学ばなければならないこと、それは、ただ、やたらと手を広げるのではなく、自分にハッキリした生き方が決まっているなら、それに徹して、毎日着実に生きてゆくことなのではないか、と思うのです。

7月の最後の日曜日、からし種やパン種の話の続きに、畑に隠された宝や、良い真珠を探している商人の話がありました。それは本当に素晴らしい価値のあるものを見つけたら、自分の全財産を売り払って、それを手に入れる、という話でした。

食欲に次々と手を広げて行くのではなく、限定されたものに本当の喜びを見出し、それに徹し満足する生き方をしたい。それがイエス様の自己限定の生き方に通じるのではないかと思います。